

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）

第7回 現地会議 in 宮城 速記録

【実施概要】

タイトル：第7回 現地会議 in 宮城 一人が集まり、つながり、元気になる地域づくりー
日時：2013年8月23日（金）12:00～16:00
会場：南三陸ホテル観洋 多目的ホール「クイーンエリザベス」
（宮城県本吉郡南三陸町黒崎99-17）

以下、敬称略

開会

開会の挨拶（池座剛：JCN 宮城現地駐在員）

復興まちづくりということテーマにさせていただいて、私は日々被災地を回らせていただいているが、だんだんとまちづくりや地域づくりのような長期的な視点で地元の人を主体として関わっていかないといけない段階に来ている。外部支援者もそれに寄り添うような形で、自分たちがただやりたいことをするのではなく、支援者同士だけで固まるのではなく、地元の人と一緒に活動していくことになると思う。住民、商店、企業…皆が集まって地域全体のことを考えながら地域づくりをする段階に入ってきている。

今回このテーマ、非常に多岐にわたるものだと改めて感じました。今回ご登壇いただく皆さんとも「地域づくりとはなにか」と聞いて回ったのですが、きけばきくほどわからなくなる状況で…でも、皆さん共通して言われるのはやはり「人の営み」だと、それが軸になっていて、人や地域の数だけそのやり方も様々だと思えます。

今回は何か一つの答えを見つけるというよりは、多様な考え方や人や方法をご紹介させていただいて皆さんに持ち帰っていただくのが目的です。事例だけでなく、皆さんとのつながりも持ち帰っていただきたいと思えます。南三陸町で今回開催させていただいたのは、こんなに甚大な被害を受けながらも地元の人達がまさに立ち上がって、連携もうまくしながら、情報発信をしながらまちづくりをされている先進的な場所として開催させていただくことにしました。今回集まりいただいた皆様に感謝を申し上げて開会の挨拶といたします。よろしく願いいたします。

阿部 憲子（南三陸ホテル観洋 女将）

皆様こんにちは。本日はこの南三陸町に全国各地からお出かけいただき感謝申し上げます。本当に多くの皆様にあたたかい応援をいただきながら今日が迎えられたなど感謝の気持ちでいっぱいです。私どももこのように旅館経営をしていますが、甚大な被害を受けてしまった地域でありますから直後より人口の流出がただただ深刻だと感じられ、人がいなくなったら街が消えかねないという思いから、このホテルは一部被災はしたものの、避難所の役目が大事だと考えながら、住民の方にお過ごしいただきました。

ライフラインがとまり厳しい環境の中、水が4ヶ月も止まっていたという難しさの中で、住民の方たちに自治会を設けながら打ち合わせをして一緒に避難所の運営を行うことが出来ました。実は旅館の仕事というのは一泊のお客様をお世話するのが主流なので、何ヶ月も一緒にさせていただくというのは簡単ではなかったのですが、一方で貴重な体験でもありました。皆さんの思いなど聞くことが出来ました。

今はなかなか被災地も簡単に事が進まず、残念ながら人口流出も歯止めが効かない状態で、それを何とか

止めたい。人口が戻らない中で何とか交流人口の増加を南三陸町だけではなくて全体で大きな問題だと思いますので、直接的な役割も担っていますのでこれからも強い気持ちを持って、もっと工夫や努力をしたいと思います。今日お集まりの皆さんのお力やお知恵を聞かせていただくことで、あらたな知恵や工夫が湧いたりするのかなと思います。外の方たちとの関わりが重要だなと。

いままではなかなか知名度のない地域でしたが、今回のことは受け止め方を、捉え方を切り替えながら、このように注目をあびたというようなことをいい意味で今後のまちづくりに活かしていきたいと思っています。この大震災によって残念ながら地域がバラバラになってしまった。このバラバラになったのをつなげるのもよその方たちの関わりがきっかけで再構築されたり、あったりしますのでご意見お聞かせください。

私達も最近取り組んでいて、この地域7割も廃業が進んでしまったという非常に残念で厳しい環境になりましたので、点在するお店を紹介する「南三陸点店（てんてん）マップ」というのを商店のみなさんと一緒に作りました。のちほどお手にとっていただければと思います。私達も具体的に行動しようと思いますのでこれからもよろしく願いいたします。このような挨拶の場をいただいて感謝申し上げます。

【テーマ1「知る」】復興の場所づくり

宮城で活躍する支援組織の方に 地域や活動の状況、課題をお話いただきました。

小野寺 寛（すばらしい歌津をつくる協議会 会長）

内外の力で復興につなげていきたいという、そんな思いが伝わるかわかりませんが、お話ししたい。震災直後から全国の皆さんに物心両面でご支援をいただきましたこと、まず心から御礼を申し上げます。ありがとうございます。

南三陸町の概要と被害ですが、「すばらしい歌津をつくる協議会」は震災前からあった団体です。昭和22年の6月、片山社会党内閣が発足し、新しい憲法や地方自治法に基づいて地方の建設を図ろうというのがそもそものスタートだと言われています。その運動で全国各地に県を中心に新生活運動などの協議会組織が立ち上がって、生活改善…戦後農村漁村の生活環境が非常に悪かったので、住みやすくしようという運動でした。時代の変遷とともに運動の内容も変わり、平成になってから名前も変えました。

以前から宮城県沖地震が起きると言われていましたので、「津波があつたら山の者が海の方々を支援しよう。山のほうで土砂崩れがあつたら海の者が助けよう。」そんな申し合わせをし、そして3.11を迎えましたので、今申しあわせの通り、私は3.5キロ山間部に住むものですので、家は流されませんでした。ですから同じ地域に住むものとして、沿岸部の支援を震災直後からしています。

南三陸町の場所は馬蹄形の地域で「歌津」「入谷」「志津川」「戸倉」という地域です。昭和30年代まではそれぞれの村として独自の文化や産業をもっていた場所です。今回もそれぞれの地域が震災直後地域の中で自己完結しようと避難所の運営や仮設の入居などしています。そういう活動を地域の自治組織である契約講を中心に対処してきました。

概要を。17815人、5365世帯は震災の前の年の南三陸町の人口です。現在は人口が14900人台に減少しています。さらに南三陸町内に仮設住宅を建てることができずに隣の登米市に486世帯が仮設住宅で暮らしています。その他にみなし仮設として町外のアパートを借りて仮設暮らしをしています。

この地域の歴史ですが、本吉郡は平泉の藤原氏とつながりがありました。ここは実は金の産地であつたからです。荘園であり、砂金や田んぼや馬を納めていました。本吉の金、気仙の金、岩井の金の産地が平泉の黄金時代を支えて発展しました。

その後源頼朝が平泉を攻めます。その時の関東武士の末裔が南三陸町内、気仙沼方面にいます。総大将が葛飾区の葛西氏です。千葉の千葉氏、三浦氏、熊谷氏…など平泉を攻めてきた侍の末裔が今、ここに住んで

います。ですから千葉さん、三浦さん、熊谷さん、小野寺さんが多いんですよ。皆関東の皆さんがたのご縁のある者でございます。そういう歴史の中で私達は生活してきました。

津波の歴史ですが、貞観11年1140年ほど前に津波がありました。地震津波がありそれから江戸時代まで大きな津波でもこれだけきています。明治29年には22000人に迫る犠牲者をだした津波があり、歌津地域だけでも約800人の犠牲者をだしました。今回は南三陸町内では約800名を超える方々、が犠牲になっています。注意して欲しいのは南三陸町の町民だけでなく、南三陸町においでになったよその方も2-30人入っていることです。決して他人事ではありません。

昭和35年のチリ地震津波で志津川地域で41名犠牲になっています。三陸沖だけでなく地球の裏側からも津波が襲来する地域であることは今までも、これからも変わらないということです。震災前の歌津地域の中心市街地です。江戸時代の町割りした場所ですがこれが今は全く更地になっているということです。13m~20m超の津波が今回はありました。3161戸が全壊。歌津地域だけでも瓦礫の山が4つほど出来た。焼却処分がようやく南三陸町内で終わるのかな…というところです。

協議会では月2回会合を開いて情報の共有をしました。それを会報にして800部用意して避難所や各家庭に配りました。今度の9月1日で31号になります。「千年後に活字で伝えよう」ということで作った文集「未来の遺言」です。重さが1キロくらいにあります。

高台移転は南三陸町全体で28箇所の計画です。仮設の集会所で手作り品や、仮設の商店街、団体や大学の学生さんが来たりして支援をいただいている。商店も流されたので移動販売車が来ています。銀行も移動ATMをだしていただきました。パソコン教室もやったりしています。

いまやっと公営住宅の造成工事が始まりました。高台移転の28箇所のうち、着工したのは4、5箇所です。これからが本格的な着工になる。この防潮堤の高さは1.7mです。この高さのことで、いま皆で議論をしている最中です。

最後に今回の被害の状況では地元だけではなんともならない。皆さん方のような町外の方々のお力を借りて一緒に復興をしていくという道をとらないと復興もできないし、その後も人的交流や物流もできない。そういう作業が始まったばかり、今後とも今まで以上のご支援をお願いしたいです。ありがとうございました。

渡部 慶太 (NPO 法人 石巻復興支援ネットワーク 事務局)

今日は「石巻に恋しちゃった」というイベントプログラムを使ったまちづくり・ひとづくりのお話をさせていただきます。「石巻に恋しちゃった」というイベントはいろんな地域活性の要素を含んでいて、地域資源の発掘や人材育成、コミュニティの再構築…などいろいろありますので、皆さんの活動に近い部分は是非参考にいただければと思います。

特徴のひとつは関係者、いろんなひとを巻き込むというところにあります。いかに協力者として巻き込むかがポイントです。例えば趣味を持っている方にプログラムやってもらったりするんですが、「ぜひやってください」とお願いしてやるのではなくて「一緒に盛り上げていきましょう」というふうに誘うと協力者が増えるなどノウハウがあります。疑問に思った部分は後ほど訊いていただければと思います。

自己紹介を。石巻復興ネットワークは地元のお母さんがたと外から来た外部の支援者で構成されています。震災後5月に立ち上げました。スタッフは12人で運営しています。趣味や特技を持っている方々にプログラムをやっていただきます。それを一定の期間に同時に行います。これは「オンパク・みちくさ小道」とい

う手法を使ってやっているのですが、楽しくできるまちづくりで継続的にやっていけて、それで成果がでるものです。地元主体のまちづくりが必要でした。

探していたら、「オンパク・みちくさ小道手法」というのがあり、地元市民の方が中心になってやっていくまちづくり地域活性の手法だったんです。早い段階で復興を見据えた時にその先に待っている地域の未来は非常に厳しいと感じました。地元に住む方々が自分たちで解決できる人材になる、というのが必要だと感じました。

いま少子高齢化進んでいますが、後期高齢者が増える。労働人口が減って行政サービスが減ってくる。高齢者のニーズは多様化する。頭は回るけど体が動かないとか、お金はあるけど外に出る勇気がない…とかいろんなニーズが出てくる。

私は実は今千葉に戻っていますが、うちの母を見ると友人などが亡くなって行ってどんどん孤独になっているんですね。精神的に不安定になると息子に依存してきたりするんですよ。私の姉にもべったりだったり…いろいろ問題が生じてきますが、そうならないように地元の方が地域で支えあいできるような取り組みが必要だということで実施をするものです。

「オンパク・みちくさ小道」というのは「オンパク」というのがまずあるんですが別府でスタートしたまちづくりの手法です。「温泉博覧会」の略です。地元に住む方々で趣味を活かしたプログラムをやる。地域の魅力に気づいたり、交流人口を増やし、わずか10年で50を超える地域で広がりました。

特徴は「小・集・短」…小：ひとつひとつのプログラムは小さい。集…はいろんなプログラムが集まるので、こんなでもいいのか？というのがどんどん出しやすくなる。短…は短期間に行う。期限がないとだらだらやっていたり、できなかつたりするので、思い切ってできる。

「みちくさ小道」は岡山県の総社市がやっているより人にフォーカスしたオンパク手法です。人材のチャレンジを応援するというモデルです。

昨年経産省のソーシャルビジネスノウハウ移転支援事業で支援をいただいて実施することになりました。第1回目は26人の達人の方でやりました。石巻の街歩きや中国出身のおかあさんが中華料理教室をしたりとか…、ヨガ、石巻やきそば、などやりました。

500名の参加していただいて、例えばベーグルづくりをやってみようということになったのですが、きっかけでベーグルづくりを起業する後押しになったりとか、子育て会議というのをやったのがきっかけでそういうネットワーク会議ができて行政・民間の方があつまってそれをやったりしています。

参加者の声としては次回あったら私達人をやりたいというかたもいれば、趣味のかたがつながっていったりした。満足度は高く400人のうち300の方にアンケートをいただいて98%でした。第2回を8月にやったらリピーターのかたが多かったです。今回は46名の達人のかたで、1500人の参加者でした。規模が大きくなりました。巻き込む力・拡がる力が強かったのだと思います。時間がないのでちょっと割愛します。

登場人物は、達人のみなさん、プログラムへの参加者、するとチャレンジが切磋琢磨して新しいサービスになっていく。想いを形にする機会や出番があると本当に人は成長して、地域が活性化していきます。オンパクの手法は宮城では5地域に広がっていて、私達は子育て中の女性に注目しています。

復興は市民一人ひとりが取り組まなくてはいけない。そういう中でささえあいやおもいやりが必要でこれからの石巻を考える上で取り組んでいかなければいけないと、それを乗り越えるためのインフラの一つがこの「石巻に恋しちゃった」だと思います。

【テーマ2「学ぶ」】全国の場合づくり

全国各地で取り組まれている地域や場づくりの事例をおききし、「人が集まり、つながり、元気になる地域」をどうつくるかを探りました。

宮定 章 (NPO 法人 まち・コミュニケーション 代表理事)

神戸から来ました宮定です。僕は大学の時に地域にはいりまして、今に至るので18年間地域の方ともに地域づくりをしてきたお話を今日少し、報告いたします。

神戸市長田区御蔵通というところから来ています。僕は4.6ヘクタールの地区で300世帯700人くらいの方が住まわれていた地区に事務所を置かせていただいています。地区の8割が焼けました。18年後の写真ですが、皆さんの応援をいただいて立派な建物が立って、なんとかこういう形になっています。ありがとうございます。

で、その中の話をするのですが、建物やインフラは綺麗になったんです。実際、人はもどったのかと…挨拶されていた女将さんも言ってましたが、建物たっけ、人口も8割くらい戻ってきたんですね。元々住んでいた方がどのくらいかというのを調べたら27.3%しか戻ってきていないという結果でした。7割くらいの方は出て行ってしまった…と、一度転出ということになりますとほとんど地区に戻ってこないんですね。いろんな要因で戻ってこれないというのを課題を分析しながらまちづくりに取り組みました。

団体の設立経緯なのですが阪神淡路大震災でたくさんのボランティアさんが来てくださって仮設住宅に向かっていたんですが、僕らはひねくれているのかまちの復興なくして復興はないということで地域づくりにかかわりました。

ボランティアの男の子と女の子と地元の企業の社長さんとでまちづくりのチームをつくるということをしました。出鼻をくじかれたのが当初、神戸はまちづくりの凄いい先進地として、「まちづくりは素人のすることではない」と言われたんですね。いっぱい事業メニューがあつてどういうことかさっぱりわからないんですね。地域の方も分からないし、僕達もわからない。ただ一緒にいてはなししていたりすると、そのうち一緒に悩めるかな？と。

専門家は直ぐに答えを言うんですが、これはできるとかできないとか言うんですが、なんでできないのか悩む過程をしていないので納得出来ない。一緒に悩むとなんでできないのか納得して次の方向を見つけさせる。「きみたちが何もできないのはわかっていた。ただそばに居てくれるだけで心強かった」と言われました。そういう間柄です。

地域の方と一緒にいると皆さんのところもそうだと思いますけど1ヶ月に1度くらいは専門家の方が来るんですね。そういう会議の中で地域の方の意見ほとんど出せないんですね。で意見をなんとなく専門家のかたに本当は伝えたいんですけど、なかなか専門家の方は偉いので伝えきれなかった。住民のペースで考える専門家というのはそんなにいないんじゃないかということで、悪戦苦闘しながら続けました。

ただ僕らも注意しなくてはいけないのは、自分たちの出会った人が地域の中でどういうひとかということをしつかり把握しておかないと、一部の人の意見を大きくするわけにもならないので、ただ声があるという事実だけは伝えようということで続けました。

人を街に戻すために、祭りの事務局をしました。700人の街に2000人が来るイベントを全国の方に応援してもらいながらやりました。それは情報交換の場にもなると、そうしていると事務所も要るので地元

に事務所を置いて情報収集するんですね。で、まちづくり協議会というのができましたんでその事務局の手伝いで、昼間他の地区の情報を聞いてきて夜の会合で伝える…というようなことをしてきました。

実行段階に入ると土地の集約というのは地元の人同士なので当事者同士なので難しく、「あなた得するようにするんじゃないのか？」とか、ということで行政の方もなかなか関わりにくい、平等にしないといけないので土地の集約案づくりから資金計画とか再建まで期間が長いのでその間どうするか？とかやってきました。

こういう問題があるということを専門家に繋ぐ役割でしたが、神戸の時は復興住宅が経つのに5年くらいかかりましたので、その5年間どう待つのか待てるかを考えました。これが（写真）僕らがコーディネートして建てた共同住宅で5年目にやっと立ちました。

現地にいながら地域を再建しないと人はなかなか戻ってこない。あとは時間がかかるのでその間の時間をどういう風に地域のひとと結びつけるかということが一番の課題で、結局情報持っている人が強い。戻ってきた27%のひとに聞くと、どこかに知り合いがいたとかまちづくり協議会の役員だったとか、ということで…。

5年後からまちは綺麗になったけどなかなか暖かさがなくなって、ほとんど友達もいなくなって…「自分たちの人と人のつながりを大切にする」とか「自分たちでできることは自分たちです」とかを目標に取り組みました。

ごく一部を紹介します。共同住宅という民間のコミュニティプラザを建てて、新住民と旧住民の交流をしたり、独居死がでないようにということで高齢者の見回りをしたり、地元の人が地元の人を支えるということで、場を提供したり、阪神淡路大震災のときは写真が焼けてしまったので思い出すしか無いということでカルタをつくったりしました。

集会所を大工さんをひとりだけ呼んできて学生よんできてつくりました。こういう取り組みが神戸の時になんとなく認められて、総理大臣賞をいただきました。

10年頑張ったんですが10年目に協議会の解散がありました。それは制度が非適応だったりとかでもめごとになったりとか、経済的に苦しくなって店が再開できないなど、所得形成ができない、うまくいっている人はいっていると妬みになったりとか地域の人が入れ替わるので会が運営できなくなったとかです。

ここからは事務局の方から頂いた宿題で、どこまで行けるかわからないですが、あとでまたパネルディスカッションがあるので少し残るかもしれませんが、僕の経験した中ですけれども、阪神淡路大震災から見た東北のかたは、神戸の時から変わっていないのは事業制度と工程をつかむ難しさというか、皆ほとんど災害危険区域と言って土地が使えず、動かなければ待つしかない、というような状況で何とかしたいけども何にもできない。

僕は東日本の現地では月に20日～25日、石巻市雄勝町というところに行ってまして、地元に住っていますので会合とかいろんな人の話をきいていると、個人の意見でなかなか会合で出てこないんですね。ちょっと東北の方には悪いですが、理由が、言わなければそれなりに、ということで。

あとは今は地域の中で平等といいますけど、船の中で雇用主と被雇用者の関係とか…それが代々つながっていますので、なかなかその関係もある。あとは漁業は配分があって強さ弱さがあったりとかします。何をしているかという、その当事者しか話せないことをリーダーに聞くとそれなりのことを言われるんですけど、他の方はまた別の話になっていたりとか、当事者しか話せないことを聞いて、復興がどのようなことなのかということを経験した生活から振り返るということをして、今、チャレンジしています。

渡辺 裕伸（農事組合法人ファーム田麦山）

皆さんこんにちは。新潟県中越大震災の被災地からやってまいりました渡辺裕伸と申します。ファーム田麦山ということで地震後にそういうものをたちあげた経験上ということでこちらに呼ばれたのかと思っています。「ファーム」田麦山というので私、農業を中心にやっていると思われるかもしれませんが、実際は職業は消防士で、この東日本大震災のときも新潟県隊として石巻に派遣されております。

田麦山というところを皆さんに知っていただきたいと思いますが、今現在は新潟県の長岡市、フェニックス、あるいは三尺の花火…御存知ですか？、ありがとうございます。その長岡と合併しまして、今は長岡市川口田麦山というところになります。地震前ですと川口町という5000人くらいの町でしたが、日本で一番長い川…信濃川と魚野川が合流するところが川口町というところで、私の住んでいる田麦山はその南側に位置していると、で、地震前は地域の小学校を中心にコミュニティが子ども、父ちゃん、母ちゃん、じいちゃんばあちゃんが臨時講師となり、地域全体で子どもを育てるよというところでした。

そういう自然の中で子どもがたくましく育ちました。地震後は市町村合併の影響を受けて、小学校の統合となりました。写真で言うと山の中に家々が点在した…過疎地です。地震は地域全体の9割が全壊になりました。地域住民が避難所に入りました。おかげさまで人的被害がなかったのがこちらと違う点かと思います。

それと中山間地の被害が非常に大きくて、後々被災者にジャブのようにダメージを与えていくんですけれども、農村地の被害があった状況です。そういう中でもこういう小さいところですので普段以上に地域住民が団結していきました。この危機をなんとか乗り越えようと…。

で、ひとのあたたかさですね。ボランティアの支援はもちろん、親身になって助けてくれました。しかし最初からボランティアとうまく行ったわけではありません。田舎ですのでよそ者に対して凄く閉鎖的なんです。そういう所をボランティア一人ひとりの方が親身になっていろいろ聞いてくれたりして、信頼関係ができるようになっていきます。私達は正直地震前は地域のことをネガティブに考えていました。山の中で不便でどうしようもない…と、できればもっと便利、便利、便利なところに住みたいと。

ただそういう人たちがまた田麦山に来ることによって、いろいろ教えてくれたんですね。地域のいいところを教えてくれました。まさに私達は木だけをみて森を見ていなかったんですね。それを教えてくれたのが外部団体の人達でした。それがあたりまえだったことが当たり前じゃなくなって地域の素晴らしさを知ることができた。いままでの便利さにあぐらかいていたことがわかりました。

地震後の出会いです。今日もいらっしゃる栗田さんもそのひとりですが、私達はそういうふれあいを大切に思いました。やはり人のふれあいは人生経験のなかでも一番の宝物だと思います。どこに行っても言うんですが、この人達との出会いが私にとっては大切だと思っています。

地震後改めて感じたことは当然自分たちもそうなんです、誰かな？と考えた時に、ああいう山の中を便利にするように先人たちが一生懸命頑張ってきたんですね、本来一番ダメージを受けてきた人はそういう人たちだったのかなと思います。

何をすべきか？避難生活をしている中で、子どもたちの笑顔に非常に救われました。これから未来を築いていく人たち、子どもが元気出るようにできないかな、と考えていたんですが、地震直後の12月に毎年恒例でスキーをツアーをしているのを強行しました。ああいう状況でしたので非難も浴びるだろうなと思ったんですが、避難生活の中でストレスが溜まっていたので、強行したらみんなが賛同してくれました。

そういう中でやっぱり話が出るのは、これからの田麦山をどうしようかという話になりました。そこで一番びっくりしたのは、感謝したのは今日も私、妻と一緒にこちらに来ていますが、元々育った人じゃなくて嫁さんに入ってくれた人たちが、「みんなでこれから田麦山（たんぎゃま）でがんばろう！」と言ってくれたことです。地元の方は「たむぎやま」のことを「たんぎゃま」って言うんですけど。非常に嬉しかったです。

老いも若きも男も女もみんな子どもたちを教育していこう、その姿を取り戻すのが田麦山の復興ではないのかなと改めて感じました。田麦山らしさを取り戻すためには、今まで培ってきた習慣から目をそらさずに尊重しよう、そして我々世代はもっと地域を知ろう、学ぼう、先人から学ぼうと。私「ファーム田麦山」の他に「いきいき田麦山」という地域の活性化団体もやっています。地震の前から市町村合併の話があって地域の特徴が危ぶまれていると、それでそういうものを何とか活かそうという話でやっていたんですが、地震があって復興のお手伝いや、これからどうするかという未来予想図をつくりました。

それで農事組合法人ファーム田麦山を立ち上げました。これは地震による被災による復興と従来型の農業からの脱却です。地域愛を重要視しました。正直疲れますね。自分たちだけで頑張らない。やっぱり私が思ったのはピンチをチャンスに変える。いままで地震前だったら農事組合法人はできませんした。地震が契機となって設立できたんだと。あたらしい田麦山らしさの一つだと思います。

「元気があればなんでもできる」支援してくれる人たちといっしょにやろうということです。先ほども皆さんが何回も言っていますが我々が主体です。主体の中で外部団体のなかから知識をもらってなんか起こす、それを実行する。最初は何もできませんのでそれを知らせて第三者の力を借りる。確立したら今度は自分たちでやる。小さなコンサートをやったりとか雪まつりをしたりとか、他団体とのコラボレーションとかしています。人集めをみんなでしたりとか。中越沖地震のお手伝い、仮設住宅の説明会、私経験しましたのでその説明をやりました。岩手・宮城内陸地震の時もやりました。「夢づくり交流会」というのを田麦山で実施したんですが、田麦山のひとだけだと話がわからないので川口にいろんな団体がいて、そのひとから田麦山をもう一度見なおしてもらって、ヒントをもらいます。既存の建物も活用します。復興後もすべてが上手く言っているわけではなくて、我々だけの活動になってしまいがちです。使っている建物の維持管理して、それを次世代に伝える。過疎化と少子高齢化はいまだに続いている。

最後に、「地域をもっと知ろう」ということです。いままでの生活習慣を尊重しようと。それによってヒントが得られるかもしれません。「先人たちから学ぶ」と「生きがい」。そこからあらたな挑戦が始まると。

何回も言いますが私達がしなければ、外部団体だけでは復興はできませんので、私達が主体です。それをやることで中央にアピールして行政を動かしたりできます。我々は素人です。外部団体から助言などもらってやりましょう。「怖いもの知らず」「あたってくださいろ」素人なんだから。しょうがありません、まずはやってみることで。

何よりも長続きしなくてはいけないので、自分たちが楽しむことが大事です。人としてそこで信頼関係を作っていく、いろいろ挑戦があるとおもいます。新たに何かをやるのは大変ですので、今までのものに自分たちが何をやるのかというのを融合していくことで長続きすることはないかというのが私の最後のメッセージです。「ピンチをチャンスに変える」これが私のプロセスです。

栗田暢之 (JCN 代表世話人)

皆さんこんにちは。現地会議宮城もこれで7回目を迎えますが、震災から2年半経とうとしています、踊り場にいるというか、この今の状況の中でもものすごく頑張って復興に向けて頑張っている姿には変わりありませんが、次のステージに行くまでにはもう半分くらい階段上がって2階に上がると、それまでには3年4年くらいかかるんじゃないかと。

いままで2年半かかりましたが同じくらいの時間が必要じゃないのか…と、今ちょうど踊り場において、上を向いても下を向いても待ちの状態が続いているのが被災地の現状ではないかというふうに理解をしています。

私は普段、愛知におりますが、東京から西へ行けば行くほど震災の風化は激しく進んでおまして、何かなければ報道はもう出ないと状況にだんだんなっていくと、これはもっともっと続いていくと…。

これはもう災害の宿命でありますから歯止めをかけるのは難しいかもしれませんが、JCN としましては、「とんでもない」と「まだまだこれからが本番です」ということで、この南三陸で開催することに非常に大きな意義を感じさせていただきました。

じゃあ何をやるんだというのがやっぱり重要で、皆様方にせっかくお集まりいただきましたので、なにかおみやげを持って帰っていただきたいと思った時に、第一部の渡部さん、小野寺さん…地元で一生懸命頑張っているってたくましい活動を小野寺さんにとっては震災前から現地の顔役として歌津を盛り上げていらっしやった、その方が震災を経てなお頑張っている姿をお話いただきました。

渡部さんは現代人というか現代手法というか、皆さんご存知でしたか「オンパク」。そういうやっぱり新しい手法というか、なにかこう復興を爽やかなイメージに変えながらマップをつくって頑張っている渡部さん、実は千葉なんですよ、ご出身が。

宮定さんと同じように外部支援者として住み着いている…と、で今日「わたなべ」さんが二人いらっしやいますから、親しい渡辺さんのほうは「裕伸（ひろのぶ）さん」と呼ばせていただきますが、裕伸さんも言われましたが外部の支援をどう引きこむかということが大きなポイントだと仰っていて、今の渡部さんや小野寺さんのやっぴらっしやることをお聞きしたのが第一部でした。

しかし、そうは言っても苦労話はいっぱいあって、ここに至るまでの経緯と今後どうするんだというのはついて回っていてそのヒントとなるようなことを持って帰っていただきたくて、神戸から宮定さんと新潟の裕伸さんをお呼びしました。

お二人には時間のない所を非常に恐縮でしたがもっとじっくり聞きたいと皆さん多分思っているって、その補足から今日はお話いただいて、このあと小野寺さんや渡部さんから、お二人に「これはどうだったの？」とおききいただいて議論を進めていきたいと思えます。

まず宮定さんに関しましては私も18年の付き合いですから、よく頑張っていますよね。大学院の当時からね、まち・コミュニケーションにかかわられてずっと神戸にはりついて頑張っているって、言われたように阪神淡路大震災も世界中を震撼させた大災害でありましたから、あの長田区の焼けた姿を始めてみたときに足がすくんだといいますか、ここによそ者が立ち入っちゃダメなんじゃないかという恐怖のようなものを感じましたが、その中で8割が焼けた町に宮定さんが入り込まれて、それで人を戻す活動、まちを町らしく戻していく活動に尽力したことをお話いただきました。

で、パワーポイントではさらっと言われましたけど、あの「みくら5」という共同型住宅、今まで住んでいたアパートの家賃では到底住めないまちに変わってしまって、一部共同住宅型にして長屋風にして、2階3階はオフィスにというアイデアをみんなで出し合って、5年目にできたのが「みくら5」という象徴的な民間の発想の住宅ができた。

もっとまちを取り戻そうということで集会所を地域住民で再生したと、神戸市からも助成金があったんですがそれじゃ足りないので寄付も集められて、日本海側のほうから古民家を移築する形でボランティア5000人関わって、まさに手作りの集会所をつくられた。

全国から注目されたので国も黙っていられずに、小泉政権が内閣総理大臣賞をくれたと、ここまではよかったと、ところがその後まちづくり協議会が解散してしまったと。ですからほぼ毎年私もおじゃましていますが、古民家ができたあたりまでの破竹の勢いのまち・コミュニケーションの活動は凄くお手本になって、修学旅行客もだいぶたくさん来ていましたよね。

そういうまちの復興の象徴みたいな活動を経て11年目12年目に私達が訪問した時には自分たちが建てた集会所が自分たちで使えませんよと、他の人の許可が要りますよ、という状況を聞いた時に何があったんだろうと、よそ者として深い話は聞けないと遠慮もあったので、聞けなかったんですけど、ただ今日は本音を話してくださいと、いうことで。

妬みとか人の入れ替わりとかまち・コミュニケーションをはじめとする一部の人の独走態勢になってしまったとか、まちの人たちがついてこないとか、そういう問題が10年目にして出てきたと、そういうことを経て現在10年間振り返った時に、制度が厳しいなとか、個人の意見がでてこないなとか、東北の状況をみて様々な感想を述べられましたけれども、そのあたりを詳しくお話いただきたいと思います。

宮定

まちづくり協議会の解散の経緯というか、助成金が最後の方はコンペ方式で県のほうで1000万円をまちづくりのために使っていいということで、そのとき1等賞で通ったんです。それが引き金でそのとき復興がうまくいっている・いっていないかいろいろありましたが、1000万円当たれば300世帯なので分けたいという話になったんですね。

そんなお金ではもちろんないのですが、やっぱり執行部に対する使い方…まちづくり協議会がさきほど独走だといわれたんですけども、実際、町の中にいるのは27%なんですよ。で27%というのは地域の中の体制をとれる人数が既がない。強い人というか復興に残れた人が残っている状況ですので、すごいびつな地域住民の関係性があったんですね。

自治会の運営の仕方も緊急時には緊急時に強いひとが出てきてだんだん旧の状況にかわっていく、その変える時期とかですね…どうやって変えるかというのが、昔の人のことを聞かないとわからないんですね。いま東北にきて生活史ということで、ずっとどういう風に地域が、いままでも人口減少の時期がもちろん迎えている時がいっぱいあるので、そのときどうやって乗り越えたか、と。で、その時地域の特徴を活かして、地形を活かしたり、海産物を生かしたりというようなところをずっと聞き取っています。現地の若い方はたくさんいらっしゃいますのでそれを共有していけるようにできればと思っています。

栗田

なるほど。まちづくり協議会としてまち・コミュニケーションも参加して、まちづくり協議会ですから地元のひともいたわけですよ。そういう方々を「まちづくり協議会」と称していたものとは別に「自治会」という存在がどんどんできて、ひとつの集落にまち協と自治会が対立するようになったということですか？

宮定

そうですね。で、まち協がでてくるのは復興事業が元で、今回も高台移転で移転協議会が作られると思うんですけど、今まであった地域のベースとはメンバーが同じかもしれませんが、そうでない可能性もあるんですね。被害にあった人が移転協議会になるので…そこがまちの将来像を考える組織体にはなかなか共有できないところがあるので…。

栗田

それで宮定さんは「まちづくり」の「まち」とは誰を指すのかということに対して丁寧に今やっつけていらっしやるということなんですか？

宮定

そうです。反省を込めて…

栗田

そこを考えなくてはいけないと。まちづくりのまちとは誰なのかと、そのまちの地域の人というのは誰なんだということを丁寧に見ていかないといけないという宮定さんの経験上でアドバイスなんですか。あとお金の問題をちゃんとしないといけないということですか？1000万円を分けたらいいとか…いつ頃の話ですか？

宮定

2005年か2006年あたりですね。

栗田

10年たってその後ですね。お金の問題をきちっとしないといけない。それを分けたらいいという意見も出てくる。

宮定

そうですね。でももう企画書はおっているものですから、そうはならないので、それぐらい格差というか…いま集落が解散するときでも場所によって少額でも本当に喧嘩になるというのをたくさん浜のほうであるので…お金の重みが人によって違いますよね。

栗田

なるほど。その辺を配慮しながら宮定さんは関わっていると。で、宮定さんに対する地元の人達の評判はどうなんですか？「おまえ考え過ぎじゃないか？」とか言われませんか？

宮定

外部から来ている人には言われますね？まちづくりをされている方には「そこまでしたらキリがない」と。でも表立って議論するかはともかく、そういうことがあるということを外部者は知っておかないといけないと思うんです。そこで揉め事が起こる可能性が十分あるので。おかげさまで皆さんの応援をいただきながらそれを見れる立場にあるので…それは伝えたい。

栗田

〇〇会合とか〇〇協議会とか、住民が参加する会合をきくと個人の主張をされる方がなかなか少ないなあとも言われましたよね。やっぱり言えない…？

宮定

そうですね、それもずっと生活史を聞いていると明治時代くらいから…代々ながれがあって、それを聞ける信頼関係をもつということが重要じゃないかと…ちょっと言いすぎかな。

栗田

要は地域、地域にローカルルールがあるので、そのルールを理解した上で人となりを見てかないといけないということですかね？

宮定

そう思います。で、いまのまま協議会方式でやってしまうと、強いひとが取っていくというふうに多分なると思うんですね。

栗田

小さな声の人、言えない人もいらっしゃる…強いものの意見がとおりやすいというのは変わらないが、宮定さんとしてはそういうことだけでなく経験上は声なき声もちゃんと聞いてあげないといけない…声を拾っていこうという活動を目指しているということですね。

宮定

もう一つは強い人だけでまちが成り立てばいいですけど、結局27%じゃないですか、それではまちは成り立たない。やはりみんなそろってこそ、まちだと思ふし…。

栗田

非常に重要な視点を語っていらっしゃるんで、でも阪神淡路大震災で10年後に起きた問題。東日本大震災はまだ2年半なので、10年後にこんな問題起きてほしくないなどは思いますけれども、そういう意味では今のうちにこうした神戸の教訓を…まあこれは報道もされませんし、宮定さんの10年間の蓄積の中での発言なので、これは貴重なご意見だということで受け止めていただければと思います。

じゃあ一方で裕伸さんですが、重要なお話をされましたけども、裏話をすると奥様を騙して連れてきたと(笑) …

裕伸

まあそういうことになりますかね(笑)。ああいうところですので…。

栗田

私も地震後おじゃましてびっくりしたのは3メートルの雪。万年雪かと思いましたがね(笑)

裕伸

そうですね。ちょうど私、カミさん連れてくる頃には小雪の時期で、秋とか春に…「紅葉はあなたのもの

だよ…」とか（笑）

栗田

それぐらい自然豊かで豪雪地帯で。裕伸さんが触れられなかった点で、小野寺さんが歴史のことをおっしゃっていましたが、田麦山を知るには歴史をきちっと理解しないといけないと思ったのは、新潟の非常に厳しい環境の集落で、それでも子どもたちを食わせるために米作りを励んできた先人たちがいると。裕伸さんたちのお父さんたちは出稼ぎにいかれて、それで暮らしをなんとか成り立たせて、子どもをそだてていく…。裕伸さんたちにはこんな苦しみをさせたくないということで、さまざまな改良を加えながら、棚田に灌漑水路をつくったり、朝飯前から田んぼをみた…とこういうつらい経験を子どもたちにはさせたくないと思いがいろいろあって、非常に便利な棚田ができあがってきたと。それが今回地震で壊されたと。で、裕伸さん、だけど田んぼやらなくても消防士だから食えるじゃないですか？

裕伸

正直そうなんです、ああいう中で先人が苦勞してきた中で、自分も気持ちが変わってきて、私の代で絶やす訳にはいかないという気持ちで、「ファーム田麦山」というのがひとつの形で。普通の農事組合法人だといいますと専業になるわけですが、実はファーム田麦山の構成員がいま25人ほどいますが、全て兼業です。ひとりも専業はいません。珍しい形の農事組合法人です。

栗田

まあ親父たちが出稼ぎまでしながら地域を存続させ続けて、子どもをそだてて、地域づくりを励んできたお父さんたちに申し訳ないと、自分の代で絶やすのは申し訳ない、むしろ自分の子どもたちにちゃんと伝えたいと思われたんですね。それが地震によって明らかになったと。で決心がついたと。

裕伸

そうですね。それを気付かされたのはよそから入ってきた人たちですね。「こんな日本一の米をつくっているじゃないですか？」「そうですかね、凄い経費だけかかるんですけど…」「それを逆手に取りましょうよ」とかいろんな案をくれたのは外部団体ですよ。

栗田

いやほんとに旨い米ですよ。

裕伸

東北であまりお米のことをまた言うと…、東北にもすばらしいお米がありますので…

栗田

ただ現実的な話、農事組合法人をつくるとか…この辺はどうされたんですか？

裕伸

最初は全くその気はなかったです。ただ一番傷ついたのは自分たちの上の世代の人で、細々やっていた農地を維持する・再建するのに、元気になるために「大丈夫だよ、せっかく作ってきた農地荒らさないから」という姿を見せるのが私個人は大事ななと思って、最初は3軒くらいで話して…三人まとまったなら法人化しないかという話を持ちかけてきてそこからですね。

栗田

で、復興事業もあるとおもいますが、そういうものの恩恵も受けてきたということですか。

裕伸

最初三人で話していた時に、行政にも相談したんですが、あまりにも規模が小さいとそんな事例はないと、私達もお金が欲しくてやっているわけじゃなくてきっかけがあればと相談したんですが、なかったと。ただし、地震後皆さんがたのご支援で、いろいろ復興基金ができてきて、その中から支援が出てきて、逆にいうと個人で立ち上げるときに比べると支援が受けられることで財政的には自分の家の復興に支障がなくなりましたね。まったく最初からそういう支援を探していたのではなくて自分たちで自立しようと気持ちからだったんですが、あとあと資金面での補助もありましたので、非常に助かりました。

栗田

そうですね。「ピンチをチャンスに変える」というのはよく解りますが、先立つものがないと進んでいかなのは現実的にはありますから、そういう意味では復興メニューの中の、農事組合法人設立にかかる補助みたいものがあるんだよということに気づくとまた一歩前進できたということですかね？

裕伸

そうです。日々の生活環境を無視できないという状況のなかで、そういうメニューが出来たというのは非常に大きかったですね。こちらでいうと海とかあるとおもいますし、そういうものが復興のお金とか現実的にみますと絡んできますので、違うと思います。

栗田

渡部さんも経産省の事業をとったといいましたけども、これを上手に取ってこないと行けないと思うんですが、そのへんのノウハウとかアイデアみたいなのは渡部さんがお持ちだったんですか？

渡部

オンパク手法については Facebook のだれかのつぶやきをみて「こんなのあるんだ」ということでそれがきっかけです。そのキーワードがひとつくりというので2011年の秋くらいでした…。

栗田

そこからヒントを得て色々調べて、こういう補助事業があるというのにたどり着いて…それがなかったらできませんでしたか？

渡部

そうですね、できなかつたと思います。その資金調達や事業を考える面で2つあって、事業計画で言うところ「何をやっていくか」というのを考える上で、私も市民活動とか経験が今でようやく3年くらいなんですけども、その状態でいきなり現地入ってなにかやろうと言っても、その次に何やったらいいかわからないわけですね。そうなったときに復旧支援のあとはまちがいなく復興、地域づくりがあるとわかっていたので…地域づくりなら全国各地でいろいろやっていますよね、だったらそれを調べればいい…知ればいい…と勉強会に出て情報調べてたどり着いたのがオンパクという手法でした。

あとはお金は非常に大変です。それをどうやってやっていくのかというと、助成金や補助金、事業収入ど

うやって作っていくのか、常にアンテナを張って勉強するしか無いですよね、震災後に生まれた団体にとっては。震災直後は助成金は得やすかったと思うが今は難しいですよね。ちゃんとやったことを報告するとか、法人としてふさわしい活動をしていかないと厳しくなると思います。

栗田

いまのお二人の話をおききになってご質問ございますか？

渡部

意見になってしまうかもしれないですけど、宮定さんがやっていた活動凄いなと思うんですけども、じゃあ僕ができるかという和多分僕はできないなと思います。他の人ができるかという他の人もできないんじゃないかなと思うんですよね。ただすごい正しい活動はやっているわけで、もっと他の人がやりやすくするというのがあるとしたら何なのか？が1点。

もう1点は裕伸さんに質問なのですが、先人の教えは確かに必要で歴史も大切だと思うんですけど、今の人達にそれを直接言ってもそんなに響かないんじゃないかなとおもうんですよね。そうなったときにどうやって歴史とか先人の教えとかが大切かを学ぶにはステップがある気がするんですが、例えば子ども若者は石巻を好きになる。好きになるからまちを知ろうとおもうわけでそういう工夫をされていったのか、教えていただきたいです。

裕伸

いちばんわかりやすい事例をひとつあげると、被災地して小学校に皆避難して、水の問題があったんです。で我々のような山間部だと簡易水道があるんですが、その時に上の年代の人が「元々の水源はあそこにあるぞ」と、で若者ひきつれて黒パイプもってここから水を引いてくれば毎日の水にはこまらないということで水を引きました。そのおかげでお風呂に入れたり、洗濯ができたりして…自分たちが何も知らないのを痛感させられたんですね。初めて村のことをしらないと気づいたわけです。

渡部

震災直後だとそういうのはわかりやすいと思うんですけど、ちょっと時間たつなかで震災を経験していない子どもや若者たちもその感覚を持つべきだと思うんですけど…。

宮定

難しいですね。地域にいるということが地域の人が置いてくれたのが大きいですね。東日本大震災でいうと応援隊とか支援員がいるので環境はいいんじゃないかなと思うんですけど…。

栗田

ある程度の役割は宮定さんたちはすごくされて、修学旅行客年間2000人？1000人ですよね。一定の防災教育とか復興支援のスキームでまち・コミュニケーションを訪れるひとがまだそれだけいると。最初はタダでやっていたけど、厳しいからひとり1000円でやっていると。

小野寺さんお待たせしました。「先人」とか「歴史」とかでできましたが、からめてお話いただきたいと思いますが、二人へのご質問でも結構ですが…

小野寺

私達の地域にも先人が伝えようとして残してくれたものがいっぱいあったんですね。今回の津波は600年前海だったところまで津波が襲来しました。その600年前に海だった所より奥にいろんな伝説がありました。

たとえば大昔大津波がきたときにその山に登った三人だけが助かった「三人立」という山、その麓には船窪という集落があって、大昔大津波の時にそこのくぼみに船が寄った。その隣の集落には船ガワラというところがあり、一つ山を超えると大船というところがあり、またひとつ超えると蛸沢というところがあり、津波の時に蛸が寄った。やはり同じように一軒だけ高いところにあっただけで、ノコリヤという屋号が付いたり。

そういう感じで南三陸町の特に入谷という地域には先人が津波の伝説を構成に伝えようとしたというのがあったにもかかわらず私どもは今そこを行ってみると三人立は400メートルの山です。船窪は志津川の河口から7-8キロも奥です。ですのでこんなところまでなんで津波が来るの？と誰も信じなかったということです。実は今回その近くまで津波が行ってそれが本当だったんだということを思い知らされたということです。そういうことを先人たちは我々に教えようとしてきた。それをもう一回地元学の中で学ぶ必要がある。

それと歴史の中でたどっていくと先ほど金（きん）の話をしました。この辺の砂金を誰がとったのというところとホウキバタケという地名があったりサノマイという地域があったり…それはホウキバタケというのは鳥取の方です。サノマイというのは栃木の方ですよ、その人達が金の技術者としてこの辺においでになって砂金を収集するという…そういう実は大昔からこの地域にいろんな技術や知識を持った人そしてその人達が産業を起し人を作って文化を作ってきたということが、なかなかいままで伝わってこなかった。

今回もこの震災を機に、世界から全国からいろんな方々がおいでになっているので、絶望を希望に変える最大のチャンスだと私は思っています。特に関西九州の方々、あんなに遠くから何度もおいでになるのは、私ども不思議でならない。よくこんなに来てくれるなと思います。距離感を感じさせない支援のありがたさ、これが最大のチャンスだと私は思っています。

栗田

そうした遠方からの支援がどんどん減っている中で、渡部さんたちの活動とむすびつくとそれがマップになったり、もっとこの地域を学ぶべきだという声がいままでしていますでしょうか？なんとか繋げたいんですよね。

小野寺

是非支援の方々と一緒に、いままでもよその人と一緒に新しい風を吹かせてもらって、そこに共同で種をまいて育ててきた、という文化ですよ。今回まさにそのチャンスだと思います。

栗田

なるほど。昔からもそういう外部支援が入って成り立った地域だと。

小野寺

しかも東半分は海ですから、世界からもそういう文化の影響を受けてきたちいきだということです。

栗田

会場からご質問があればお受けしたいと思いますが…どうでしょうか。お考えいただいている間に…小野寺さんからお二人にご質問ありませんか？

小野寺

阪神淡路大震災も中越地震もきいて、二年半しか経っていないけど同じような現象が出てきているということですね。人の気持ちというのは神戸だろうが南三陸町だろうがこういう最悪の極限状態になった時に同じような現象がでるなど。その時にどうやってリーダーは先を見て足元をみつめて一緒に前に進む工夫がないと何回も流されてしまう危険性があることを、先進地の状態をきいて解りました。

栗田

どなたかご質問どうでしょうか？ 石巻社協の北川さんどうでしょうか？

北川 進（社会福祉法人石巻社会福祉協議会）

支援を活かす地元の力というのが問われるなど、様々な支援を私達が地元でどう活かせるかと、お二方まさしくその穿刃をきられてきたんだな…ということであらためて痛感して、社協の立場でそういった力をつけないといけないなということと…。

もう一つは宮定さんのいわれたように、10年後にいろんなひずみが、協議会の解散という形ででたということはあらためて私達が取り組んでいる復興の取り組み、まちづくりに地元の人たちが本当の意味でついてきているんだろうかと、本当の意味でついてきているということを実感しながら今の取り組みをやらないと、10年後にそういったものが結果として現れてしまうなということを感じながら聞かせていただきました。

栗田

詳しくはこのあとのテーマ3でお話いただくこととしまして、宮定さんからは「まちづくり」の「まち」ってどういうことなんだ、ともしっかりと丁寧に聞かないといけないと。裕伸さんからは先人のことを知ることが大事で、自分たちがいかに知らなかったかという思いから「ピンチをチャンスに」と言葉をかけながらも、それはすべて子どもたちのためにやろうという地域の結束力が大きな次のステップになったと、そういう事例を踏まえながら、小野寺さんの、昔からこの地域は外の人々の支援によって成り立ってきたところだと、今こそそれをもう一回学び直してうまく支援を取り込んで復興させようという活動。そして渡部さんは現代社会の Facebook とかあるいはオンパクとかを利用しながら、力強くまさに地元の人達を巻き込んで頑張っている人と。

まあつきなみですが「よそもの・若者・馬鹿者」といいますがやはりそういうキーワードがこれからもどんどん大事になってくるなど感じさせてくれたパネルディスカッションになったと思います。それではご登壇いただきました4人の方に、拍手で御礼を言って終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。

<拍手>

【テーマ3「つながる」】場所づくりのワークショップ

[ファシリテーター]

鈴木 まり子 (NPO 法人日本ファシリテーション協会)

[ブース]

- 1 「ひとが集まる場作り」 — カフェ、食堂、教室などの事例から
- 2 「ひとを育てる仕掛け作り」 — オンパク、祭りなどの事例から
- 3 「ビジネスづくり」 — オーナー制度や研修、体験プログラムの事例から

※グループディスカッションのため速記不可

閉会

閉会の挨拶

石塚 直樹 (みやぎ連携復興センター 事務局長代理)

みなさん今日をご参加いただきまして、ありがとうございます。参加したいけども今日はできなかったというお話もいくつか声を頂いております。またこれから継続して開催していきます。またご登壇いただきました皆様、ありがとうございます。当事者として支援者として、中越ですとか神戸ですとか、これまでの災害の復興の先を歩いている先進事例としていろんな話が聞けたかと思えます。

今日のテーマは地域づくりでした。これからの地域づくりのためにグッドモデルを持ち帰ってもらうこと、もう一つはつながりを今後の活動に活かしていくこと、だったかと思えます。

私の感想ですが、小野寺さんが、これまでの歴史をみても外の人と作ってきた地域だったということが、私の中ではすごく印象に残っています。あるいは、その他のかたから支援を活かす地元の力をどうつけていくか、が大きな話題になっていたかと思えます。このようなテーマを今後も引き続き考えていきたいと思えます。

みやぎ連携復興センターは今回共催という形で入っていますが、なかなかご存じない方もいらっしゃるかとおもいますが、皆さんの力・支えになればと思っていますので、ぜひ今後もよろしく願いいたします。閉会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

以上